

ひと夏のカチューシャ

rogee

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

カチューシャとオリジナルの男の子のほんのりラブコメものになります。

小学6年生の男の子が、夏休みに、亡くなった母親との思い出の溪流に行くために、一人旅をします。

初めて電車に乗って旅をして、偶然カチューシャと出会って……というお話です。

夏休みのちよつとした冒険という感じで書いています。

男の子は、カチューシャも小学生だと思いでいます。

子供の淡い初恋ものです。

ノンナとクラーラもちよびつとだけでできます。

オリ主ものがお苦手であれば、どうぞく!!

(PIXIVに投稿済みの作品です)

目次

第1話

「え？ 今年は溪流に行かないの？」

僕の問いかけに父が悲しそうに首を振った。

「どうして？ 毎年行ってたじゃんか？」

「駄目なんだよ、カケル。父さんはあの場所には、行きたくない。あの場所は、母さんとの思い出の場所だったんだ」

そういわれると、返す言葉がなかった。

僕の母親は、今年の2月に死んだ。

交通事故だった。

来年4月から中学生になる僕の学ラン姿を見ることなく死んでしまった。

父は、母さんが死んでから、表向きは明るく振舞っていた。

だがちよつとした表情や動作に、悲しみの念が滲むときがある。

そのことを知っていたから、僕は父にそれ以上無理強いはできなかった。

二人でもそもそと夕食を食べ、僕は2階の自室にこもった。

ベッドに寝転び、天井を見つめる。

夏休み。

本当なら毎年、僕ら家族は溪流に遊びに行っていた。

そこは、母の故郷の街にある溪流だった。

僕は目を閉じる。

去年の夏の光景が思い浮かぶ。

バーベキューをした。

水遊びをした。

今年は、それができないのか。

父はその溪流を見るのが耐えられないのだろう。

母のことを思い出してしまふのだろう。

けれど僕は。

あの溪流から遠ざかって、このまま2度と行かなくなってしまうことの方が嫌だ。

母との思い出や繋がり場所から遠ざかってしまうと、これまでの全てが消えてしまうような気がする。

……父さん、ごめん。

僕は翌朝、小遣いを握りしめて、家を出た。

あの溪流に向かうために。

※

「溪流のある街の名前は覚えていた。

電車を乗り継ぎ、駅にたどり着く。

そこからの問題だった。

いつもは、駅前で父が車をレンタルしていた。

車で溪流まで向かっていたのだ。

だが僕一人では、車の運転なんてできない。

さて、どうしようか……。

立ち尽くしていると、駅員のおじさんが声をかけてきた。

「どうしたんだい？」

「あ、実は、行きたいところがあつて……」

僕が溪流の名前を口に出すと、おじさんは「バスで行くと良いよ」と教えてくれた。

よかった。

バスがあつたのか。

喜び勇んで、改札を出て、駅前のロータリーに向かう。

バスの時刻表をチェックする。

「うわあ。マジかよ……」

バスは、1時間に1本しかない。

しかもついさっき出たばかりだった。

「仕方ない。時間を潰すか」

眩いて、バス停のベンチに目をやると、小さな女の子がいた。

僕よりも少し年下に見える。

小学生だろう。

6年生の僕よりも、ひと回りは小さい。

4年生ぐらいかな？

真っ白なワンピースが夏の陽光に映えている。

少し強気な瞳と眼があった。

すごく可愛い。

僕がつい、見とれていると、女の子が口を開いた。

「ちよつと、あんた」

「え？ ぼ、僕？」

「そうよ、あんたよ。さっきから何をじろじろ見ているの？ カチューシャに用でもあるわけ？」

「あ、あはは」

僕は困ったように頭を掻いた。

すごく気の強い女の子みたいだ。

見とれていた、と答えるのは恥ずかしいし、一体どう弁明しようかと、悩んでいると、女の子がすつくと立ち上がる。

やっぱり、凄く小さい。

130センチ無いんじゃないだろうか。

ひざ丈のワンピースのすそが、風にふわりと揺れる。

「煮え切らない男ね。そんなんじや、過酷な戦場で生き残れないわよ？」

そんなことを言いながら、僕の方へとトコトコと歩いてくる。

「ご、ごめん」

訳もわからず、僕は謝った。

「あんた、バスを待ってるの？」

「え、うん」

「この辺は本数が少ないみたいよ。どれに乗るの？」

「これだけど……」

僕が指差した時刻表をまじまじと見つめ、女の子が宣言した。

「1時間もあるじゃないの！ ちよつど良いわ。バスを待ってる間、カチューシャの相手をしなさい！」

※

女の子……カチューシャちゃんは、今度はベンチではなく、ロータリーの脇にある噴水のへりに腰掛ける。

腰を下ろした位置のすぐ隣を指さし、

「ここに座つてもいいわよ。カチューシャが許可するわ」と笑う。

君の噴水じゃないけどね。

けれど、その妙に尊大な態度が逆に微笑ましくて、僕は楽しい気分になった。

どうせバスはなかなか来ないんだ。

この子の話し相手も悪くないだろう。

僕が隣に腰掛けると、カチューシャちゃんは僕を見上げて顔をしかめた。

「むう……」

「どうしたの？」

問いかけには答えず、立ち上がり、腰掛けていた噴水のへりに立つ。

「ちよ、危ないよ？」

「いいのよ。これでカチューシャの方が背が高いわ」

「そんなことを気にしていたの？」

「カチューシャはいつだって誰よりも上にあるべき立場なんだから」

「でも、降りた方がいいよ？ バランスが悪いし」

「ふん。こんなのへっちゃらよ」

腰に手を当てて胸を張るカチューシャちゃん。

その時、一陣の風が吹いた。

僕の目の前でカチューシャちゃんのスカートが舞い、ワンピースの中の下着が丸見えになる。

「きゃっ！」

あわててスカートを押さえようとして、カチューシャちゃんがバランスを崩す。

「カチューシャちゃん！」

僕はあわてて立ち上がり、彼女の体を支えた。

「……あ、ありがとう。助かったわ」

顔を真っ赤にしてカチューシャちゃんが礼を述べる。

頬を赤らめているのは、下着を見られたからか、バランスを崩した

のがカツコ悪かったからか。

その両方だろうか。

「きよ、今日は、あんたに免じて座っておいてあげるわ。と、特別にカチューシャよりも背が高くても許してあげる」

「それはありがとう」

「ところで、あんた。名前はなんていうの？ カチューシャはカチューシャよ」

「僕は、カケルだよ。新藤カケル」

「ふうん。それじゃ、カケルって呼ぶわね」

「うん」

「カケルは、こんなところで何してるの？」

「僕は……バスを待ってるんだ」

「そんなことは知ってるわ。どこに行くの？」

「その……。溪流だよ」

「溪流？」

カチューシャちゃんが、きよとんとした顔で僕を見る。

言葉が難しかっただろうか？

「溪流……つまり、ここからバスで山を登っていくと、綺麗な川があるんだ。そこに行きたいんだよ」

「ふうん。そんなところに行つて何をするの？」

「何かをするつてわけじゃないけど」

言われてみて確かに、するべきことは何も思い描いていないことに気がついた。

僕は、母との繋がりを断ち切りたくなくて、この街に来たけど、溪流にたどり着いた後、なにをするか何も考えていなかった。

一人ぼんやりとするのだろうか？

それはそれでかなり虚しいな。

「カチューシャちゃんは、ここで何やってるの？」

「ちよつとー！」

「な、なに？」

『ちゃん』ってなんなの、『ちゃん』って」

「え？ 駄目だった？」

「あんた、どう見てもカチューシャよりも年下でしょ？ カチューシャ『様』って呼びなさいよね」

僕はカチューシャちゃんをまじまじと見つめる。

年上？

いやいや、どういても小学生だろ。

背伸びしたいお年頃なのかな。

合わせてあげてもいいんだけど、『様』はさすがにちよつとな。

『様』って呼んじゃうと、上下関係みたいになっちゃうよ？」

「それが良いのよ。カチューシャはとつても偉いんだから」

妙な自信たっぷりに言い放つ。

僕は苦笑しながら言った。

「でもさ、僕は上下関係よりも友達になりたいな。せつかくこうして偶然出会えたんだしさ」

「と、友達!？」

「そ。友達。友達が上下関係だとおかしいでしょ？」

「友達……」

カチューシャちゃんが、ともだち、ともだち……とぶつぶつ言っている。

少し照れたような表情で顔を上げると、言った。

「それじゃ、特別よ！ 友達になることを許可するわ！」

「ありがとう！」

「ただし！ 『ちゃん』は禁止。『カチューシャ』って呼び捨てにするこ
と！」

「わかった！」

※

カチューシャちゃん……いや、カチューシャは、今日は「敵情視察」
にこの街にやってきたらしい。

どういう意味だろう。

何かの遊びなのかな。

「ノンナは急用ができて、夜にしか到着できないの。それで今日は1

日、暇なのよ」

「バスを待ってたわけじゃなかったんだね」

「この辺は散歩し飽きて、なんとなく座っていただけ」

「がばつと、カチューシヤが僕に身を乗り出す。

「ね、ね。溪流ってどんな所？ カチューシヤに説明しなさい！」

「ん、そうだなあ」

僕は顎に指を当て、いつもの溪流の光景を思い描く。

「山の中なんだけどね、少し開けていて、川があるんだ。ちよつと流れは速いんだけど、すごくきれいな川で。魚も泳いでるんだよ」

「お魚ー！」

カチューシヤの目が輝く。

「魚は好き？」

「そうね。サリヤンカもセリョートカ・バト・シユーバも大好物よ？」

「サリヤ……？ 料理か何か？」

「そうよ。とつてもおいしいんだから！」

「溪流も、アユ料理ならあるよ」

「アユ料理？」

「うん。アユ釣りができる場所があつて、釣ったアユを焼いてくれたりするんだ」

そんな会話をしていると、視界の片隅にバスの姿が見えた。

「あ、ヤバいー！」

しまった。

話し込んでいる間に、もうそんな時間になつてしまつていたのか！

「どうしたの？」

「バスが来ちやつてる！ ごめん、カチューシヤ。僕はあれに乗るねー！」

言つて、走つてバスに向かう。

何とかぎりぎり、間に合った。

バスに乗り込んで1分もたたないうちに、ドアが閉まる。

間一髪だった。

「間に合って良かったわね」

「いや、ほんとだよ……って、え？ カチューシャ、どうして君まで乗ってるの？」

「退屈だから。カチューシャも一緒に行ってあげるわ。その溪流に感謝しなさい」

「ええええ〜！」

※ 車内に僕の驚きの声が響いた。

「な、なによ。一緒だと嫌だともいうの？」

「い、いや、そんなことはないけど。でもあんまりにも唐突だったから……」

「何でも物事は早めに決断するのが良いのよ。それとも、本当に嫌なの？」

僕は首を振った。

驚きはしたけど、この子と一緒にいることは楽しい。

溪流で二人で遊べるなら、それはむしろうれしいことだ。

「全然嫌じゃないよ。むしろ嬉しいぐらい」

「そ、そう。そうに決まってるわよね。このカチューシャが誘ってあげてるんだから」

カチューシャが少し照れたように言う。

「でもさ、待ち合わせとかはいいの？ その、ノンナさんだっけ？ 合流する時間を決めてるんじゃないの？」

「ざっくり夜と決めているだけ。向こうもまだ用事があるはずだし。山でそんなに夜まで過ごさないでしょう？」

「それはそうだね。夕方までには帰るつもり」

「問題なしよ」

「そっか」

僕は胸をなでおろした。

なんとなく、ノンナさんというのが怖い人なような気がしたからだ。

カチューシャの保護者とか、そんな感じがする。

待ち合わせに遅れるようなことがあったら、僕が怒られそうだ。

※

だが、20分ほどのち、僕はとんでもない過ちに気づくことになった。

「あ、あれ?」

「ん? どうしたの?」

バスの窓から見える光景が、全く見覚えのないものだ。

いつも、父の運転する車から見える光景は、市街地を抜けると坂を上がっていき、途中からは完全に山道になる。

バスと自家用車ではルートは多少違うかもしれないが、それにしても、いま車窓から見えている光景は、違いすぎる。

もう20分も乗っているのに、山道に入っていく様子はないし、周辺は見たことのない街並みだ。

妙に整理された綺麗な家が立ち並んでいる。

再開発地区的というか。

「ごめん、ちよつと座っていて。ルートを確認してくる」

僕は席を立つ。

バスの運転手が、「走行中は立ち上がらないでください」とアナウンスしたが、無視をして、運転手に問いかける。

「あの。上沢溪流公園に行きたいんですけど、このバスで合っていますか?」

「え? 違うよ、これじゃないよ」

運転手が無慈悲な言葉を述べた。

「これは33系列って言ってるね、途中で別の道に入って、山の脇の工業団地に向かうんだ」

「それじゃ、溪流公園には?」

「通らないよ、そこは」

なんてこった。

僕は頭を抱えた。

「ど、どうしよう……」

ふらふらと席に戻る。

「ねえ、一体どうしたの?」

カチューシャが問いかけてきた。

本当は、男らしく「心配しないで」と言いたかったけど、無理だ。僕は絶望に震えた声を上げる。

「勘違いしちゃったんだ。乗るべきバスを間違えた。あの時、バスが来たからあわてて乗っちゃったけど、ちゃんと確認すればよかった!」

どうしよう。

僕がこんな風だと、小さなカチューシャは泣きだしちやうかもしれないのに。

僕が頼りにならなきゃいけないのに……。

ぺしつ。

「え?」

唐突におでこをはじかれた。

顔を上げると、カチューシャが小さな指でデコピンをしていた。

「ごらっ。しっかりとしなさい」

「で、でも……」

「予想外の危機が起こった時こそ、冷静に対策を練るべきよ。一緒に解決法を考えてあげる。情報を出しなさい。バスは全く違うルートなの? それとも、途中までは同じ?」

「と、途中までは同じみたいだ」

「どこから違うルートに入ってるの?」

僕は、先ほど運転手から聴いた停留所の名前を上げる。

「ということは……」

カチューシャが、壁に貼ってある運行ルート表を目で追う。

「ここね。それで、今が、ここだから……左に逸れて、まだ3駅だわ」

「そ、そうみたいだね」

「ちよつと、訊いてくる」

カチューシャは立ち上がると、運転手の方に歩み寄る。

何か話し合ってから、戻ってくる。

「次の駅で降りましょう」

「次で？」

「ええ。ここから分岐駅までは徒歩で15分ぐらいみたい。戻ってもそこまで苦痛ではないわ。もしかしたら、この先で、折り返しのバスと合流できる駅があるなら、そこまで乗った方がいいかと思っただけ、そういう駅はないみたい。だから、少しでも早く降りるのが正解よ」

す、すごい……。

間違えたルートに乗ってしまったことで頭がいっぱいだった僕と大違いだ。

僕は恥ずかしさでうつむいた。

その時、運転手のアナウンスが聴こえる。

「次、穂積。穂積」

「お、降ります！」

あわてて下車ボタンを押した。

※

穂積バス停は、何もないさびしい場所だった。

ただの田舎の小路に、ぽつんとある停留所だ。

気分が暗くなる。

「ごーらっ！」

「あ、いたたた」

手の甲をひねられた。

「そんなに暗い顔しないの。間違えちゃったものは仕方ないでしょ？」

それよりも、少しでも早く目的地に着けるよう努力しましょ？」

「そ、そうだね」

「あ、そうだね！」

「どうしたの？」

「分岐点の停留所に戻らなくても、徒歩ならもつと先の場所にショートカットできるかもしれないわ。地元の人に訊いてみましょ？ねえ、その人！」

小道の向こうから歩いてきたおばさんに、声をかける。

「あらあら、どうしたのかしら？」

優しそうなおばさんが目を細めた。

「ここに行きたいの。どうすれば早く着けるのか、道を知ってる？」

「溪流公園ね。それなら、そっちのあぜ道を行くといいわよ。小川に突き当たるから、小川を上って行ってちょうだい。そうしたら、山間の釣り池に出るわ。そこが、溪流公園にすぐ着くバス停よ」

「ありがとう。感謝するわ！」

カチューシャが、満面の笑みで振り返る。

「ね？ 少し努力すれば、たいていの物事は何とかなるわ」

※

二人して、畦道を歩く。

夏の日差しがきついかと思っただけど、木陰が多いのでそれほど苦にならない。

むしろ、木漏れ日が心地いいぐらいだった。

カチューシャは、楽しげに鼻歌を歌いながら僕の一步先を歩く。

「それって、何の歌？ どことなく懐かしい感じだけど、日本語じゃないよね？」

「これはロシア民謡よ」

「ロシア……」

「行ったことある」

「ううん」

「カチューシャもないわ」

「そうなんだ」

「でも、いつも憧れているの。凍りつく大地。そこで生きる人々。ロシアの人々は、きつと強いわ。大変な環境を生き抜くんだもの」

「だから、カチューシャも、強くありたいの？」

「ううん……」

カチューシャの足が止まる。

「そんなに深く考えたことはないわ。カチューシャはカチューシャよ。私自身が、誰よりも強くありたいだけ」

「そっかあ」

再び、てくてくと歩き出す。

「あのさ」

「なあに？」

「僕ね……僕も、たぶん、強くありたかったんだ」
「強く？」

「実は、これから行く溪流つてさ。僕のお母さんが好きな場所なんだ。でも、お母さんは死んじゃって。毎年、家族で来ていたのに、今年の夏は、お父さんが行きたがらないんだ。僕はそのことが悔しくて。お母さんが死んじゃった悲しみに、負けないぞって。そう思って、溪流に行こうって思ったんだ。でも、結局、弱虫だ。バスは間違えちゃうし、慌てふためいて、何もできなかったし……」

「そんなことないわ」

「え？」

「カケルは十分に強いわよ」

「ど、どうして？」

「だって。お母さんの死と向き合ってるじゃない。動きだせないお父さんよりも確実に強いと思うし、あなたの同い年の男の子たちのほとんどよりも、あなたの方が強いと思うわよ」

「そ、そう、かな」

「ええ！ このカチューシャが保障するのよ！ 絶対だわ！」

「あ、ありがとう！」

なんだか、心の中が温かくなるような気がした。
と、畦道が開けて、広い湖が目前に現れた。
すごい。

釣り池つてこれのことか？

こんなに大きくて、綺麗な湖なんだ。

知らなかった。

「わあ！」

思わず、歓喜の声が漏れる。

「素敵ね！」

カチューシャが駆けだした。

「カケル！」

湖を背に、振り返る。

「あなたのおかげよ！」

「ど、どうして？」

「だって、間違えたバスに乗らなかつたら、こんなに素敵な湖を見ることができなかつたじゃない！」

「あー！」

そっか。

どんなことにも、こんな風に。

前向きな何かを感じ取ることができたら。

人生はとても楽しくなるんだ。

「さ、バス停は湖の裏側みたいよ。湖畔沿いを散歩していきましょ？」

「うん！」

※

バスは、15分も待たないうちにやってきた。

畦道を歩いているうちに、程いい時間が過ぎていたらしい。

バスに乗り込み、溪流公園へ。

湖からだど10分もかからなかった。

「うわあ、涼しいわ！」

カチューシヤが驚きと感動の入り混じった声を上げる。

「夏なのに、こんなに涼しいのね」

ここだけは、僕の独壇場だ。

「そうなんだ。水が流れているからだと思うよ。それに、山間だからね！」

「ところどころ日差しがさして、水面がきらきらしているのね」

「気に入った？」

「もちろんよ！ ね、ね！ 川のあちら側に渡ってみたいわ！」

「うくん。少し流れが速いからなあ。カチューシヤの足だと、危ないかも」

「むむう……そうだ！ カケル、肩車しなさい！」

「か、肩車？」

「そうよ。ノンナがいつもしてくれるの。カケルがカチューシヤを肩

車して、川を渡ってくれたらいいのよ」

「それはさすがに無理だよ」

「どうしてよお」

「ノンナさんて、身長はどれぐらい？」

「うん、とつても大きいわ」

「大人のん？」

「ノンナは高校生よ」

「それだと、僕とは背が違うよ。僕はカチューシャよりちよつと高いくらいだよ？ 背負うのは無理だよ。でも、その代わり……」

僕は勇気を振り絞って、カチューシャの手を握る。

小さくて、あつたかい手。

「こうして、僕が、手をつないでおくから。二人で溪流を渡る？」

「う、うん」

怒るかな、と思ったけど、カチューシャはおとなしく頷いてくれた。じゃばっ。

足を溪流に踏み入れる。

さらさらとした流れが心地いい。

「足を滑らせると危ないから。一歩ずつ、確実に進もうね」

「わ、わかったわ！」

僕たちは、慎重に、溪流を渡っていく。

途中、すこし転びそうになりながらも、何とか渡りきった。

「やったね！」

「ええ！」

僕たちは顔を見合わせて笑いあう。

「あの建物は何かしら？」

溪流を渡った先にある和風な作りの建物をカチューシャが指差した。

「ああ。あれは、温泉だよ。正確には料亭兼温泉かな」

「温泉！」

カチューシャの目が煌めく。

「入りたいわ！ あんなに歩いて、汗びっしりなんだもの！」

「確かにそうだね」

僕は、ボディバッグを開けて、お小遣いをチェックする。
うん。

これなら、大丈夫そうだ。

「それじゃせっかくだし、入って帰ろうか」

「ええー！」

※

一時間後。

「ふう……初めて入ったけど、いい湯だった」

温泉に入り、ロビーのソファでくつろいでいると。

「待たせたわね！」

なんと、浴衣姿のカチューシャがやってきた。

「あれ？ どうしたの、その服」

僕は思わず見とれてしまう。

ほのかに濡れた髪、火照って赤く染まった頬が、艶めかしい。

小さな女の子のはずなのに。

年下……だと思っただけ。

どうしてだろう。

凄く、色っぽい……。

「ふふふ！ 浴衣の貸し出しサービスがあつたのよ！」

カチューシャがぺったんこの胸を張る。

「ね。あつちでアイスを売ってるわ。一緒に食べましょう？」

「う、うん」

手を握られた。

わ、わ。

なんだか、胸が熱くなる。

は、早くアイスを食べて、冷やさなきや。

※

アイスを食べ終えて、ロビーでゆっくりして、帰りのバスの時刻表
を見ると。

「し、しまったー！」

夕方を過ぎるとさらに本数が減るらしい。

「またもや一時間以上待つことになってしまった。」

「こ、これはさすがにノンナに怒られそうね……」

「連絡した方がいいんじゃない?」

「そうね……って、あれ?」

「どうしたの?」

「ここ、圏外だわ」

「や、山の中だから……」

※

駅前に着くころには、すっかり外は暗くなってしまっていた。

バスを降りると、背の高い女性の人影が。

すらりとした、綺麗な人だ。

この人が、ノンナさん?

「カチューシャ!」

女の人が、声を上げる。

お、怒られる?」

「と思ったけど、彼女は、心底うれしそうに、カチューシャを抱きしめた。」

「もう、心配しましたよ」

「ごめんね、ノンナ?」

「無事なら、良いんです」

「よかったですね」

後ろから、もう一つ人影が。

「こちらは金髪の女の人。」

「外国人さん?」

「クラーラ! あなたも来てくれたのね」

カチューシャが笑顔を見せる。

「ダー。カチューシャ様のいらっしやる所なら、どこにでも参ります」

「さ、様?」

カチューシャって、この二人とどういう関係なんだろう……。

「さて。話は伺っております」

ノンナさんが僕に目を向けた。

「こ、今度こそ、怒られる？」

身構えた僕の目の前で、ノンナさんが深々と頭を下げた。

「へ？」

「このたびは、カチューシヤのことを色々とお気遣っていただき、ありがとうございました」

「い、いえ、そんな。ぼ、僕の方こそ……」

「カケル！」

カチューシヤが、僕の名前を呼んだ。

澄んだ瞳が、僕を射抜く。

「ありがとう！ 最高に楽しかったわー！」

ちゅっ。

僕の頬に、柔らかいものがふれる。

「こ、これって……」

「特別よ？」

カチューシヤが、いたずらっぽく微笑む。

僕は、頭が爆発しそうになった。

「では、我々はそろそろ……」

「そうね。ノンナ！」

「はい」

掛け声に、ノンナさんがしゃがむ。

カチューシヤを肩車。

「ふふふ。カケルよりも高いわね！」

「そりゃそうだよ」

そこで、会話が途切れる。

お互いに、別れの時間が迫っていることを理解している。

僕が口を開こうとした矢先、カチューシヤが先に言った。

「ねえ、カケル」

「う、うん」

「いつか、もっと背が高くなって、ノンナを追い抜いたら、会いに来なさい！ また遊んであげるわー！」

カチューシャが、元気いっぱい微笑んだ。

「ね？ 約束よ？」

「う、うん！ 絶対に僕、もっと大きくなるよ。それで、カチューシャに会いに行く！」

「いい心がけね！ 待ってるわ！」

僕は大きく頷いた。

心の中の寂しさはもう掻き消えていた。

家族のことで悩んでいた嫌な気分はどこかに立ち去り、前向きな目標が、僕の中に生まれた。

カチューシャと、ノンナさんとクララさんが去っていく。

僕はその後ろ姿に、力いっぱい手を振った。

彼女たちが見えなくなると、駆け出した。

駅の階段を、駆け上る。

改札口を入ると、家に帰る電車が車で、少し時間があった。

僕は携帯を取り出し、父に電話した。

いつまでも、子供のように逃げていちゃいけないと思ったからだ。

カチューシャみたいな、心の強い人になりたい！

父を責めるのではなく、僕は僕で、母の死と向き合いたいと、ちゃんと伝えたい！

「あ、もしもし、お父さん……」

「カケル？ どうしたんだ、こんな夜まで帰らないで……」

「そのことなんだけど、実は僕、今日さ……」

僕は、今日あった出来事を話した。

そして、母の死から逃げるのではなく、きちんと向き合いたいという気持ちを伝えた。

僕の言葉を聞く、父の相づちは、優しかった。

(完)